

アートの鑑賞で認知症の方に活力を！ それを担うエデュケーター育成をめざす。

絵画を見ながらエデュケーターと対話することで、認知症の人に活力を与えるというプログラムが米国で大きな効果を上げている。一般社団法人Arts Aliveはそのマニュアルを翻訳し、日本でも同様のプログラムを実施できるようエデュケーターの育成に乗り出した。

アートで認知症の方に活力を与える マニュアルを翻訳する。

ニューヨーク近代美術館(MoMA)。近現代美術専門の美術館として数多くのコレクションを持つこの美術館が、「Meet Me at MoMA」と題したプログラムとそのマニュアルを製作した。驚いたことにそれは認知症に対応したプログラムなのである。認知症の方とその家族が、専門のエデュケーターにリードされながら作品を見て、気付いたことを自由に対話するというもので、すでに米国では大きな効果を上げている。

一般社団法人Arts Aliveはこのマニュアルの翻訳を行

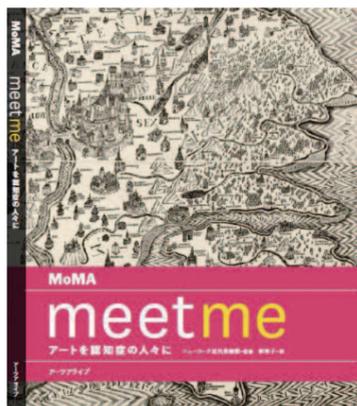
い、日本のエデュケーターを育てる事業に取り組んでいる。同法人はこれまでも、「すべての人に日常では味わえない新たな感動を届け、創造する喜びと生きる活力を得てもらうこと」を目的に、高齢者や子どもたちを対象にしたさまざまな企画を実施してきた。

代表理事である林容子さんは、米国コロンビア大学でアートマネジメントを学び、パブリックアートの企画を行うかたわら、武蔵野美術大学などで教鞭をとる人物である。

「アートには人を元気づける力があります。美術館の中に閉じ込めるのではなく、日常の中にアートを置いて、いつでもふれあえるようにすることが根底の考え方です」

今回のプログラムを林さん自らが認知症の方2名にテスト的に実施したことがある。結果は良く、若年性認知症の男性は「本当に楽しかった。生きがいになる。協力をするので、ぜひ日本でも広めて欲しい」とまで語った。

この言葉に背中を押され、林さんはマニュアルの翻訳の許諾をMoMAに申し出た。しかし、簡単ではなかった。このプログラムはメットライフ財団の100%の支援で製作



AJOSCの助成により製作したマニュアル



このマニュアルを使用したプログラムは認知症患者に対し、米国では大きな効果を上げている
※著作権を考慮し、文字は見えなくしております。



2011年1月ブリヂストン美術館における
アーツアライブによるプログラム風景
©クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》1908年頃、石橋財団ブリヂストン美術館蔵

されたもので、MoMAの一存で決められるわけではないとのこと。林さんは何度も嘆願し、ようやく許可を得ることに成功した。

日常から離れて、 自由に語ることが快感につながる。

日常から離れて、自由に語ることが快感につながる。このプログラムは20分ほどのもので、鑑賞者とエデュケーターが対話をする「双方向性」に特徴がある。

「エデュケーターは自分の考えを述べるのではなく、相手に自由に発言させて、その反応を見ながら次の質問を考えなくてはなりません」と林さん。美術の知識だけではなく、認知症の特徴や対処に精通し、なおかつコミュニケーション能力も要求される。林さんらは全国の100カ所の美術館でプログラムを実施できるよう、300名のエデュケーターを5年間で養成したいとしている。

では、このプログラムはどこに面白さがあるのだろうか。林さんによれば、たいていの人が絵の表面をなぞるだけ

担当者より



助成の成果を
日本のために広く
活用していきます。

一般社団法人Arts Alive
代表理事
林容子さん

念願のマニュアルでしたが、販売目的では出せない性質のもので、助成なしでは完成しませんでした。心より御礼申し上げます。オリジナルを製作したMoMAの思い、そしてAJOSCの志も胸に抱いて、これから全国に広めていきたいと思っています。

で、本当に絵を鑑賞しているとはいえないという。作者は何百時間もかけて絵に思いを込める。それを1分程度眺めただけで受け取れるものではない。このプログラムでは、そうした作者の心に触れることができるという。

「作者や絵については何も教えません。最初は鑑賞者も思い思いの印象を語りますが、対話をしていくうちに、そのものずばりの回答をしたりします。もちろんどのような回答でもかまわないのですが、絵のもっている情報伝達力に驚きますね」と林さんは語る。

日常からしばし離れて、絵画の世界に入り、まったく未体験の思考をする。普段はしない批評や感想を述べることで、自分の再発見にもなり、脳に開放的で創造的な快感をもたらす。ともすれば意気消沈してしまいがちな認知症の方に、このプログラムはリフレッシュとインパクトを同時に与えて生への意欲を取り戻させるのだ。

また、このプログラムは家族や介護者などと受けることが鉄則だ。そこで共有した体験によって、精神的に深みのある関係性や会話にもつながっていく。

「認知症だけではなく、あらゆる人に効果のあるものなのです」と林さんは語る。

日本全国の主な美術館に、訓練を受けたエデュケーターが配備される日がくるかもしれない。多くの人が精神的な悩みに苦しむ現代社会において、このプログラムは画期的なソリューションになりそうである。